岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

# センリョウ、フタリシズカ及びキビヒトリシズカの受粉機構



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2008-03-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高橋, 弘<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12099/461 |

# はしがき

種子植物は、雄性配偶体を花粉という形で雌性配偶体に近づいて、精子（あるいは精細胞）を卵の近くに放出して授精する方法を確立した。花粉が雌性配偶体の近くに運ばれる授受粉という行為は、ほとんど他動的に行われる。従って、種子植物は受粉をいかに経済的に効率よく運んでもらうかということが、進化における一つの命題であると考えれ、被子植物の花の進化もこの制約の中にあると言えよう。

進化初期の被子植物の花の構造と受粉様式については、未だ十分に解明されていない。被子植物の初期の受粉様式に関しては、化石からの重要な情報はあまり期待できないため、主に現生の原始的被子植物における受粉様式から推定せざるを得ない。最近は、化石情報の蓄積と系統解析方法の進歩により、被子植物の基部に位置する群がかなり明確になってきた。センリョウ科植物は基部被子植物群の一つである。この植物の花は無花被であるとともに、一つの雌蘂と一つの雄蘂からなるという、基本的に単純な構造をしている。また、白亜紀の早い時期に、センリョウ科植物の花に極めてよく似た形態を持つ花化石が多く知られている。進化初期の被子植物が無花被花を持っていたかどうかについては、まだ未解明であるが、このような単純な構造を持つものの受粉様式の解明は、被子植物の進化初期の受粉様式の推定に役立つと考えられる。

このような背景をもとに、センリョウ科の日本産種における受粉様式の解明を試みた。花が小型であるため人為受粉実験等は難航し、また自生地が非常に少なくなった種もあり、野外中心の研究の困難さを今回も体験したが、ほぼ当初の計画を達成できた。成果について、現段階で二つの論文「Pollination biology of *Sarcandra glabra* (Thunb.) Nakai (Chloranthaceae)」と「Pollination and Reproductive biology of *Chloranthus japonicus* Sieb. (Chloranthaceae)」を脱稿したのでその原稿を掲載し、もう一つの論文は骨子ができあがったのでそれを掲載することにより、報告に代える。

本研究に当たり、高山市の長瀬秀雄氏と高松市の三谷進氏には現地調査で大変お